ある結婚式で……

私が、あるチャペル・ウェディングの司式をしていたときのことです。式は順調に進み、誓約を交わす場面になりました。私は、花婿に尋ねました。

「あなたは、健やかなる時も、病める時も、この女性を……」

その時突然、美しく着飾った花嫁が、その場に倒れてしまったのです。彼女は完全に意識を失っていました。その時まで水を打ったように静まり返っていた式場は、騒然となり、皆が立ち上がりパニック状態になりました。介添え人は花嫁に歩み寄り、頭を支えて、「大丈夫ですか、大丈夫ですか」と叫びました。ホテルの従業員は、「誰か、水を持ってきて」と言い、ある者は、「頭に血が昇るように、足を高くして」と、大変な騒ぎでした。

もちろん、私は式を中断し、何もできずに、ただ呆然と立ち尽くしていました。花婿も同じでした。数分後、花嫁の意識は戻り、まだ気分はすぐれない様子でしたが、どうにか花婿の隣に座ることができる状態になりました。

再び式を続けることになり、誓約を終え、指輪の交換の場面になりました。花婿が花嫁の指に指輪をはめようとした時、彼女がまたもや意識を失ったのです。会場

はまた騒がしくなりました。介添え人は責任を感じて、私に言いました。「先生、もうやめましょう、もうやめましょう……」結局、私は式を短縮して、花嫁がフロアに横たわったまま、二人が夫婦となったことを宣言し、祝福の祈りで式を終了しました。

その花嫁は、式が終わるとすぐに介添え人やその他の数人の手に支えられてチャペルから運び出されました。幸いなことに、彼女は、時間がたつにつれ回復し、披露宴の方は何ごともなく終わったそうです。花嫁が意識を失ったのは、ただ貧血と式の緊張のためだったのです。今でこそ笑い話ですが、その時はまったく冷や汗ものでした。

一番大切な儀式

結婚式というものは、やはり出席者に緊張感を与えます。特に、それが花嫁、花婿の立場であればなおさらです。親戚、知人など重要な招待客が二人の門出を祝福し、正装して出席するのですから、緊張をするなという方が無理です。

司式をしていてよく見かけるのは、足がガクガクしたり、手が震えたり、また額に汗をかいたりしている姿です。こういう緊張のしるしは、ほほえましくもあり、おかしくもありますが、これらは健全な結婚式のしるしでもあると思います。なぜなら、それは二人がこの式に真剣に臨んでいる証拠だからです。

多くの人は、緊張のため式のあいだ中ぼうっとしています。私自身、三十年前の自分の結婚式で、牧師がどんな話をしたか全く覚えていません。ただ一つ記憶にあるのは、牧師が式辞の中で言ったひとつのジョークです。彼は、教会に集まった一五〇人の出席者の前で大声でこう言ったのです。

「この二人は、金持ちにはならないでしょう。」

みんなが吹き出しました。すると、牧師は続けて

「しかし、神持ちだから大丈夫です。金持ちにはなれないかもしれませんが、神

さまが必要を満たしてくださるので大丈夫なのです。」と説明を加えました。そして会場の人はみんな、ほっとしました。そのひとことだけが、私の結婚式で記憶していることです。

私たちのほとんどは、結婚式で何を言われたのかは覚えていませんが、とにかく結婚式をしたことは覚えています。だからといって、結婚式に意味がないと言う訳ではありません。あらゆる儀式の中でも、結婚式は一番大切な儀式です。なぜなら、私たちがそこでする誓約は、あらゆる機会を通して試され、私たちのその後の長い人生に影響を与えるからです。

結婚の三つの柱

そもそも結婚式とは何なのか、結婚するとはどういうことなのでしょうか。私たちはどうしたら結婚生活がうまくいくのかということについて、きちんとした教育を何も受けていません。お手本として、互いに愛し合い尊敬し合っている両親を持っているなら、その人は幸運といえます。しかし、親は不完全であり、学校で結婚について教えてくれるわけでもなく、結婚生活で予想される諸問題にあらかじめ備えてくれる結婚カウンセラーも、日本にはほとんどいません。それに加えて、別居や離婚がますます増え、若者たちは、父親や夫の良いお手本を見ることのできない家庭で育つケースが多くなっています。

では、何を参考にしたらいいのでしょう。バイブル（聖書）は、人生のガイドブックとして長い間多くの人たちに愛され親しまれている本です。この聖書が、結婚とは何か、そして男女がいかにして健全な家庭を築いたら良いのかを説明しています。

まず第一に、神は最初にすべてのものを造られ、人は、神の創造物の中の最高傑作であると書かれています。そして、神は、人を男と女に造られ、彼らが結婚する

こと、また家庭を社会の基礎とするようにと教えています。最初の人類アダムとエバ（英語ではイブ）の結婚の時のことが、聖書ではこう記されています。

「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」

（旧約聖書・創世記二章二四節）

ですから、聖書によれば、結婚するとは、次の三つの事をすることです。

第一に、離れる。

二番目に結び合う。

そして、一体となる。

この三つのステップをこの順序で進む時に、私たちの結婚は神の立てられた計画と調和し、基礎を固めることができるのです。結婚は、カメラの三脚のように、この三つの重要な要素の上に立っています。この「離れる、結び合う、一体となる」という三要素は、チャペル・ウェディングの順序の中にも見ることができます。

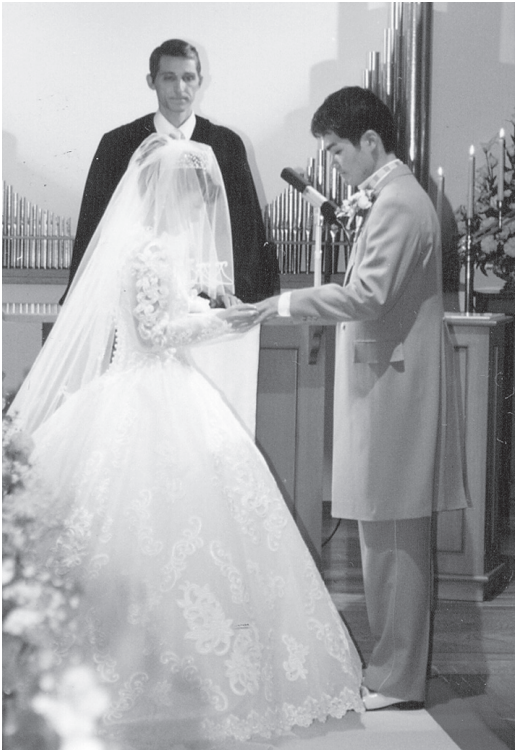
三つの柱　1……離れる

まず、「離れること」は、新郎新婦入場の形の中に表されています。花嫁は、父親にエスコートされて入場し、父親は花婿のところまで来て、彼に娘を渡します。それから、二人は親を離れ、前に進みます。この最初の入場シーンは、男と女がそれぞれの家族を離れて、独立した家庭を築くことを象徴的に表しています。自分の家族を離れ、自分の足で立つこの日のために、親たちは息子と娘を育て、教育を与え、備えてきたのです。

「離れること」には、法的な意味合いもあります。多くの場合、二人は、新しい戸籍を持つことになるからです。そして、夫が新しい家庭のリーダー（戸籍の筆頭者）となりますから、二人の人間関係の優先順位が、これまでとは変わることになります。それまでは、若い二人にとっては親が最も重要な位置を占めていたのが、今度は結婚相手がその位置を占めるのです。このような、「離れる」というプロセスなしには、二人は自分たちの家庭を形成する喜びを味わえません。結婚した相手の両親との関係がこじれるのは、ほとんどの場合、夫か妻が生まれ育った家庭から

精神的に乳離れしていないか、親が息子や娘を完全に手放していない時なのです。

司式をしている著者



1……離れる　「絆を断ち切る」

結婚一年目に、自分が、断ち切るべき親との絆をきちんと切っておかなかったことに気づくことがよくあります。たとえば、夫が妻の作る料理に対して、勝手な期待を抱くこともその一例です。男性は、ふつう母親の料理に強い愛着を持っていて、「おふくろの味」という言い方をします。「男の心をつかむには、胃袋をつかめ。」と言う人もいるくらいです。母親は、息子の好物をよく知っており、これが母と息子とのひとつの絆になっています。ですから、結婚しても、妻が自分の慣れ親しんだ味の料理を作ってくれるものと無意識に期待します。彼が意識して母親の料理を「離れ」、妻のやり方を批判せずに受け入れるのでなければ、ここで新婚夫婦のぶつかりあいが起きるのは目に見えています。

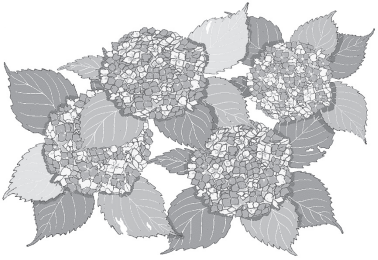
私の知り合いに、「おふくろの味」を作らせるために妻にあれこれと指図していた男性がいました。彼は、鍋の前に陣取って、妻にああしろ、こうしろと命令したので、妻は、すっかり料理に自信をなくしてしまいました。彼女は彼女なりにベストを尽くしたのですが、彼の方は満足せず、おふくろと同じ味にすることを要求したのです。これでは、妻に対して失礼というもので、彼が、「自分の父と母を離れ

て」いなかったことの証拠です。

しかしついに、彼は気がつきました。教会で誓いの言葉を交わした時に、自分は「おふくろの味」を離れるべきだったのだと。それで、その若い夫は妻に言いました。

「これからは、君がおいしいと思うものを作って。ぼくはそれを喜んで食べるから。」

それで彼女はプレッシャーから解放され、それから二人は、自分たちのオリジナルな味を新しく作り出すことができたのです。



1……離れる「親との同居」

日本では、ことに長男の場合、親と同居するケースが少なくありませんから、「離れる」というステップは、とても重要です。同じ屋根の下に住んでも、心情的に親から離れることはできます。その場合夫は、「父母を離れる」という努力をし、また、お姑さんに対して弱い立場にいる妻を、よく理解する必要があります。互いの自由を尊重し、不必要な干渉をさけるためにも、両親とは適度な距離が必要です。

私が、司式をした皆さんからいただく手紙の中には、転居通知がときどきあります。数年間二人だけで暮らした後に、両親と同居することになった、という話を聞くことは珍しくありません。それぞれの家を出て、絆を強めた新婚夫婦は、その後、親と同居しても問題を二人で解決していくことができるでしょう。しかし、親との衝突が起きた時、夫は、親に味方して自分の妻に敵対しないように注意してください。

ある時、私が結婚式の司式をした女性から、悲しい手紙をいただきました。それは、二人だけでいた時にはうまくいっていたのに、夫の両親と同居するようになってから、夫が両親の味方をするようになり、それが原因で離婚してしまった、とい

う内容でした。このような悲劇を避けるためにも、夫は妻を第一とするように努め、妻を孤立させないように努力することが必要です。

誤解しないでいただきたいのですが、「離れる」とは、決してもはや親の面倒はみないとか、敬わない、という意味ではありません。むしろ聖書は、「あなたの父と母を敬え。」（旧約聖書・出エジプト二〇章一二節）と教え、またそうしたら長生きできるという約束も与えています。

結婚は、絆を断ち切るという面で、赤ちゃんの誕生と似ています。赤ちゃんが生まれる時、へその緒を切られなければ、成長して行くことはできません。同じように、夫と妻は、結婚した時に両親からある意味で断ち切られてはじめて、二人の愛情が育ち、やがては老いた親の助けとなることができるのです。「離れること」、これは健全な結婚生活の第一ステップです。

三つの柱　2……結び合う

結婚の第二のステップは、結ばれることです。これは、式のちょうど中ほどにある、誓いのことばの中に表されています。新郎は、健やかなる時も、病める時も、新婦を愛し、敬い、慰め、助け、生きる限り妻に対し忠実であることを約束します。新婦も、同じ誓いを交わします。そしてこの誓いを象徴して、指輪を交換するのです。神と家族と友人たちの前でのこの約束と象徴的な行いによって、二人は生きる限り堅く結ばれます。

私の友人の牧師が、結婚式で、こういう例話を使っていました。それは、結婚において「結ばれる」ことの意味を、よく表していました。米国のアリゾナ州に、世界的に有名なグランド・キャニオンがあります。渓谷の底を流れるコロラド川は、泥のために赤く染まっています。このコロラド川が、ホワイトリバーという、その名の通り透き通った川と合流する場所があるのですが、赤い流れと透き通った流れは平行に流れて行くのではなく、混じり合って、元々の色を失って行きます。また、合流地点では、流れは乱れてにごります。しばらく流れて、穏やかな流れに戻りますが、その時は、もはや二つではなく、一本の川となっているのです。

結婚も、まさしくこれと同じです。私たちは新しい家庭にそれぞれ自分の色を持ち込むのですが、その色が混じり合わねばなりません。私たちは、自分の色、つまり性格や育ちを失うわけではないのですが、混じり合った時に、絵の具のように違った色を作り出すのです。しかし、合流は、また「にごり」をも生み出します。互いを摩擦し、互いのわがままや欠点があらわになります。しかし、私たちが誓いの言葉に忠実であり、そういう困難な時を乗り越えるなら、私たちも緩やかに流れる川のように、もはや二人ではなく一体であることを発見するでしょう。